

祖父に学ぶ米作り

庄内町立余目第一小学校四年

松浦 蒼一郎

ぼくの家は農家です。祖父と父が米作りをしています。祖父と父が作る米はとてもおいしくてぼくの自慢です。ぼくも春に種まきを手伝いました。二十キログラムの種もみが入ったふくろはとても重くて、

「よつこらしよ。」

と言って持ち上げて機械に入れるのに、祖父は軽々と持ち上げて機械に入れます。

祖父は力だけでなく、米作りの様々な知識も豊富です。小さいとき、祖父と父が、

「地面の温度がまだ十二度だな。」

と話しているのを聞いたことがあります。小さいぼくは何のことかわかりませんが、今年の夏に読んだ本の中に、『田んぼの苗を植えるには、地表面の温度が十三度以上になる五月の連休から』と書いてありました。父と祖父は田植えの時期の相談をしていたのでした。祖父は苗を育てる時、春の気温の低い時期はハウスで苗を守るが、守りすぎても弱い苗になってしまう。だから、苗本来の力を信じて強い苗を育てることが大切だと教えてくれました。田植えをする時も祖父のたくさんの知恵と工夫があると思えました。

稲を田んぼで育てていることにもわけがありました。それは稲が水の好きな植物で、田んぼの水には稲を育てるための養分がたくさん溶け込んでいたからでした。ぼくの家の田んぼも北楯大堰と最上川の栄養がいっぱい入った水で稲が育っていることを祖父に教えてもらいました。祖父は田植えの後には朝夕毎日のように田んぼの見回りをして、田の水の調節をしています。それは、寒さや大雨、病気から稲を守る仕事だったと気づきました。こんなに一生けん命に世話をしているも、台風などで稲がだめになったときは涙が出るほどくやしいと話してくれました。だから、祖父は天気にも病気にも強いじょうぶな稲を作るために、稲の成長状態に合わせて適切な量と種類の肥料をあたえるように工夫をしているそうです。長年の経験による判断が必要になるそうです。祖父は農薬を使わずに作る有機米作りに挑戦しています。農薬を使わないので、虫がついたり病気になったりして豊作になる可能性はほとんどありません。それでも有機米作りに挑戦する祖父はぼくの自慢です。

祖父に話を聞いて、米作りは決して簡単ではなく、頭と体を使う大変な仕事だということがわかりました。米を作る農家にとって稲を育てるといことは、失敗の許されない真剣勝負です。だから、今日も祖父と父は一生けん命汗を流して、秋にたくさんがやく米を実らせるためにがんばっています。そんな祖父と父をぼくはかっこいいと思います。

もうすぐぼくの家でも稲刈りが始まります。田んぼ一面に稲穂が広がっています。今年もぼくも稲刈りに挑戦してみようと思います。そして祖父からもっとたくさん稲の育て方や秘密を教えてくださいたいです。

●全国優秀賞・山形県知事賞●

じじのおこめはさくらんぼ

大蔵村立大蔵小学校一年

門脇 陽希

八がつ二かよるは、ほたるびコンサートでした。おじいちゃんのだなだが、ぴかぴかきれいにひかっています。

ぼくは、じじのおこめがだいすきです。じじのおこめは、「さとのゆき」というなまえがついています。ゆきのようにしろくて、もちもちしています。

じじに、
「なんで、こんなにおいしいの。」

と、きいたら、じじは、
「はやまから、おいしいみずがたなだにながれてくるからだ。」

と、おしえてくれました。ママは、たなだは、あさがさむくて、ひるがあついから、おいしいおこめができるんだといっていました。みずやおんどが、おいしいおこめをつくっているなんて、びっくりしました。

ぼくは、たねまきやたうえ、いねかりのおてつだいをします。「ぼんすきなおてつだいは、いねかりです。じじに、コンバインにのせてもらいます。じじといっしょにするレバーそうさが、とてもたのしいです。つぎつぎと、いねが、かりとられていきます。したのだなだから、だんだんうえのほうにかつていきます。すみっこは、かまでかります。ばあちゃんが、「てをきらないように、うえのほうをもって、いつきに、きるんだよ。」

と、おしえてくれたので、そのとおりにやったら、できました。

いっぱいみのつたいねは、とてもおもしろかったです。ぼくは、一ぼしか、あるけませんでした。ばあちゃんには、いっぱいはこべるので、ちからもちだとおもいました。

いっぱいおてつだいたあとは、ばあちゃんとママがつくった、おいしいおにぎりをたべます。おなかがあつて、二つもたべました。ぼくのすきなバナナもあつて、うれしかったです。かぞくみんなでたべるごはんは、さいこうです。

じじのおこめを、いっぱいたべて、おおきくなりたいです。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

ぼくの田んぼ

寒河江市立西根小学校二年

軽部 翔真

五月のある日、おじいちゃんのぶどう畑に行ったとき、入口の前に、おこめのなえがありました。ひつくりかえっておいてありました。まわりの田んぼを見て、ぼくはおこめをじ分でそだててみたくなりました。たまたまあった小さな赤いジョウロに、まだはっぱがみどり色をしたなえをとって入れました。そして、おじいちゃんとおばあちゃんに見せて、

「ぼく、じ分でおこめをそだててみたい。」

と言いました。おじいちゃんは、

「じゃあ、田んぼつくってあげる。」

と言いました。

じてん車でうちにかえってまっついていると、おじいちゃんが車でかえってきて、はっぱうすチロールに土を入れてきてくれました。水を入れて、なえをう

えました。ぼくの田んぼのできあがりです。大きくなって、おこめがなるといいなあと思いました。

つぎの日から、おこめをそだてるのをがんばるぞと思いました。毎日学校からかえると、ベランダにおいてあるぼくの田んぼを見て、水がすくなくときは水やりをしました。何日かたつと、五センチメートルくらい大きくなっていました。一か月くらいたったら、すごく大きくなっていました。うれしかったです。

夏休みになると、白い花がさきました。おこめの花は三、四ミリメートルくらいでした。花がさきおわると、みどり色のおこめがなりました。くきが八十一センチメートルもありました。おこめのほは十七センチメートルありました。ほについているおこめを数えたら、八十五つありました。一本のほで一口分のおこめができるそうです。一本からこんなにとれるんだと、おどろきました。

おこめがちゃ色になったら、おじいちゃんに白くしてもらって、たいてたべたいです。らい年は、田んぼをもうすこし大きくしてみんなにごちそうしたいです。

●全国優秀賞・山形県知事賞●

伝えよう、米作りの行事

河北町立西里小学校六年

後藤 芽衣

「わあ、きれい。去年より大きい。」
みんなで作っただんご木飾りを遠くからながめたら、まるで満開の桜の花のようだった。

一月、私の住んでいる中島地区では、子ども会や地区の人や老人クラブの人達でだんご木飾りを作る。もう十五年も前から、公民館で小正月の行事をやっているようだ。私はおじいちゃんから、

「昔は、どこの家でもだんご木を飾ったものだ。年祝や赤ちゃんが生まれたなどがあると一段と大きく飾ったんだ。幸せと豊作を願って作ったんだな。」

と教えてもらった。だんご木に意味があるなんて知らなかった。

だんご木を作った後は、雪中田植えがある。外

に出て、雪の中にわらと豆がらをたばね、苗に見たてたものを植える。この時、じいちゃんがみのをつけ、かきをかぶって昔のかつこうをする。

雪中田植えは、米や豆の豊作を祈る行事だ。田植えをする時、「あきの方」に向いて祈るのだそうだ。「あき」とは、その年の福の神がいるところだ。昔の人は、神様に豊作を祈っていたのだ。つまり、米や豆を手に入れることは、大変なことだったのだ。

私は、五年生の時、田植えと稲刈りの体験学習をした。昔から続く米作りを子ども達に体験させたいという思いで、公民館の運営委員の人がお世話をしてくれた。

田植えが終わった後に、「こびる」というものをごちそうになった。昔は、田植えの間におなががすくと、田んぼの横で、ご飯のようなものを食べたのだそうだ。私達は、運営委員の人が作ってくれたみそときなこゆかりのおにぎりをごちそうになった。私の好きだからあげもついていた。ほのおの葉にくるんだ「たなごめ」というおかしも食べた。ほんのりあまくて、田植えの疲れもとれるようだった。昔は、家族や親せきの人など大勢で

田植えをして、みんなでこうやって「こびる」を食べていたのだろうかと思った。

私の家の田んぼでは、今、機械を使って田植えをしているが、機械が入らない所は、じいちゃんとかばあちゃんが手作業で一つ一つ植えている。昔は、全部手で植えていたかと思うと、昔の人はすごいな、大変だなと思う。みんなで力を合わせてやったから米作りができたのだろう。

公民館で、老人クラブの人から教えてもらい、しめ飾り作りの体験もした。米作りの大変さだけでなく、楽しさも学ぶことができた。

お米は、毎日食べるものだ。だから、お米の事を知るのは、とても大切なことだ。これから、小正月行事や公民館活動がずっと続いて、昔の米作りが伝わってほしいと思う。



●山形県農業協同組合中央会会長賞●

米づくりを体験して

新庄市立昭和小学校六年

青木 実央

今年、わたしたち五・六年生は、永作もちというもち米づくりに挑戦しました。これは、山形県新庄市でたった一人しか育てていない貴重なもち米です。田んぼの先生石井さんがその貴重なもち米の種もみを譲り受け、「やってみないか?」と提案してくださったことで、わたしたちは、石井さんに次いで三番目の永作もちを育てる人になったのです。

五年生のときに米づくりを体験しているわたしたちにとって、今まであまり人が育てたことのないもち米を作るということは、ワクワク・ドキドキする体験です。学校前の花だんを田んぼに変えて、芽出しからもちつきまで、全てをできるだけ自分たちの手でやってみようということ、無農薬の米づくりを始めました。しかし、今年で

この昭和小学校は閉校になってしまいました。だから、今年がラストの米づくりになるのです。わたしは、いっしょうけんめい育てて、みんなでおいしいおもちを食べたいと思いました。

まず最初は、芽出しをした種もみを苗箱に入れます。貴重な米なので、ていねいに、ひと粒ひと粒気持ちを入れて入れていきました。そして、毎日交代で水やりをしました。すると、芽が出てどんどん大きくなっていきました。その成長を見ていると、とってもうれしくなりました。

次に二つ目、田起こしと代かきです。くわでザックザクとみぞを作っていきました。

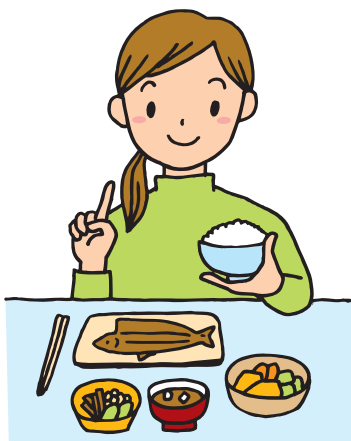
「何だか昭和開拓みたいだね。」

と言って、みんなで「昭和郷の歌」を歌いながらがんばりました。もともと昭和は荒地で、わたしたちの先祖がこの地を開拓したということを忘れないようにと作られた曲です。わたしは、すぐに疲れて次の人と交代したので、昔の人は、これとずっと続けていたなんてすごいなあと思いました。

次に三つ目、いよいよ田植えです。いっぱい太陽の光を浴びてすくすく育った永作もちの苗を、

わたしたちがいっしょうけんめいくわで起こした土に植えていきます。去年もやりましたが、土に素足で入るのは、やつぱりなれません。水が生ぬるくて、土がグニユツとした感触に、思わずゾワツとしてしまいます。それに、この中を歩いて苗を植えるのは、足がぬかってなかなか進めないのです。苦労しながらも何とか終了。田植えの後の冷たいお茶のおいしかったこと。そして今、水の管理をしながら、すくすくと育つ稲を観察しています。

これから、稲刈りなどの作業があります。最後においしいおもちが食べられるようにみんながいっしょうけんめい育てていきたいです。芽出しからもちつきまで、一から体験できるこの活動を通して、食べ物を作る大変さや食べ物の大切さを改めて感じました。これから、お米を始めとする食べ物を大切にしていきたいと思っています。



●全国優秀賞・山形県知事賞●

ごはんの力

山形市立第三中学校二年

森村 春輝

震災が起きたときのことを思い出すと、僕の頭の中に、いつも土鍋のごはんが浮かんでくる。激しい震れがとても怖かったこと、雪が降る中、不安で不安でたまらなく家に向かったこと、停電で家の中も町中も真っ暗だったこと、家族みんなで一部屋に集まって、防寒具を着たまま布団に入り、寒さから身を守りすぐ逃げられるようにと考えながら夜を過ごした事を、今でもはつきり覚えていてる。でも、家族みんなが無事で一緒にいられたことがとてもありがたかった。

停電でいつも通りの生活はとうてい無理だ。食事をどうするか家族で話し合い、卓上コンロを使ってごはんを炊くことになった。キャンプで一度は経験したことはあったが、本

当にうまくいくのか不安だった。母が土鍋にといだ米を入れて、コンロに火を点けた。コンロの周りだけがぽつと明るくてあたたかくて、ぼくはずっと見ていた。母が「そろそろいいんじゃないかな。」と、鍋のふたをあける。すると、ほわっとした湯気といっしょに、ごはんのいい香りがたちのぼり、心も体も温かくなったのを覚えていく。

今年夏休みに入る前、先生から震災のときのある中学生の話聞いた。津波の被害にあつて、避難した体育館であの夜を送ったという。その日は何も食べるものがなく、寒い不安な夜をすごした。初めて食べ物が届いたのは、次の日の午後だったそうだ。何もついていないおにぎりが一個。その人は、なかなかそれを口にできずに体育館にじっとしていたら、見知らぬおじいさんから、

「食べる。食べると元気になるから。」

と言われた。そうしたら、涙が止まらなくなつて、泣きながらおにぎりを食べたという。

ごはんを食べる。毎日のあたりまえのこと

なのに、それはものすごく大きなものをぼくたちに与えてくれることなのだ、改めて思った。あの不安な夜をほつとさせてくれたごはん。震災から一歩踏みだす元気を与えてくれるごはん。

先日、思いついてあの土鍋を取り出した。ぼくがその鍋でごはんを炊いて朝ごはんを作ろうと思ったからだ。家族の喜ぶ顔が見たくて、プクプクツツという鍋の音を聞きながら、ごはんが炊けるのを楽しみに待っていた。おいしいごはんができるのを想像していたら、部屋にこげたにおいが漂った。

「しまった！」

慌てて火を止めて、ふたを取ってみたい気持ちを感じるところを、しばらく待った。できあがりタイマーの音と同時に、ときどきしながらふたを開けた。丸こげだったらどうしようと思ったが、目につやつやのごはんがとびこんだ。早速家族にできたことを知らせ、茶碗によそい、みんなで朝ごはんを食べた。

「今日のごはんはいつもの何倍もうまいな。」
と父が言い、母も妹も

「おこげもおいしいよ。」

とうれしそうに食べてくれた。ただのごはん、それが他の何よりごちそうに思えた。あの時と同じ幸せな気持ちになれた朝だった。

「ごはんを食べないと力が出ないぞ。」

亡くなった祖父がいつも口にしていた言葉だ。祖父は生前米作りを五十年以上も続けていた。米作りは、厳しい暑さ、降り続く雨、台風などの自然災害から稲を守り育てるため重労働が続く。そんな仕事をしてきたからこそ、一食一食がいかに大切か、経験を通して知っていたのだろう。だから我が家は昔から米食である。そのおかげで、勉強でも部活動でも頑張れる自分がある。ごはんを食べられることに感謝して、これからもたくさんの力に変えていきたい。ごはんは、体だけでなく心も元気にする、ぼくのエネルギーの源なのだ。



心の主食

米沢市立第一中学校三年

留守 めぐみ

毎日六時二十分、我が家の朝食の時間だ。平日はもちろん、休日でも我が家の朝食はいつもこの時間である。夕食は仕事で帰りの遅い父はほとんど一緒に食べられない。そのかわり、朝食は毎朝家族そろって食べるのが我が家のルールである。

朝が弱い私は毎朝母に起こされ、のろのろと起きてくる。でも、台所のそばにある私の部屋のドアを開けるとすぐ、炊きたてのごはんのいいにおりがして、ぱっちり目覚める。同時に急におなかが減ってくる。

茶碗にごはんをよそうのは私の仕事だ。初めは母がしている仕事だったが、小学校に上がったばかりのころ、私が母にその仕事を譲ってほしいと頼んだのだ。その仕事を私は今

も続けている。炊飯器のごはんにしゅもじをいれて、下から上へひっくり返す。そっと空気を含ませるようにまぜることで、ごはんがふつくらとなるそうさ。そうしてふつくらとなつたごはんは一粒一粒がつやつやで輝いているように見える。そして、父、母、私の順に炊き立てのつやつやごはんを丁寧によそう。その時に心で唱える呪文を小さいころ母に教えてもらった。

「今日一日元気で過ごせますように。」

この呪文を唱え始めてもう八年以上になる。そのおかげで今もみんな元気に過ごせているのかもしれない。

「いただきます。」

「いただきます」はお米を作ってくれた農家の人、それにお米に感謝する言葉だ。その意味がわかったのは私が小学四年生の時だった。小学四年生の時、授業で稲作のことを学習し学年みんなでバケツでお米を作ることにチャレンジした。一人一つの青いバケツが配られてそれでお米をつくるのだ。土も何種類かまぜてそれにお米の種もみを植えた。その後もど

んどん生えてくる雑草をむしったり、水をやったりと大変だった。先生に教えてもらった通り、きちんと心をこめてお世話した。毎朝お水をあげて、放課後も家に帰る前に友達と様子を見に行った。クラスの皆と相談して、お米がすずめなどの鳥に食べられないよう、いなくなつたCDを持ち寄つて「鳥よけ」をつくつたりもした。でも収穫できたお米は学年全体合わせてもほんの少し。茶碗の半分にも満たないくらいの少ない量だった。自分たちで作つたお米をみんなで家庭科室のお鍋で炊いた。その時は、量が少ないながら炊き立ての甘い香りがした。米作りの難しさ、そしておいしいお米のありがたさを実感した瞬間だった。

お米は日本人の主食だ。他の国は小麦や、いも、とうもろこしなどでお米と同じ穀物だ。でも私は他の穀物とお米は日本人にとって根本的に違うものだと思つている。エネルギーをとるといふ点では、どの穀物を食べても同じことだろうと思うが、お米は日本人にとって「心」の主食だと私は思う。風邪をひいたとき

はおかゆに、運動会のおときはおにぎりになど日本人の生活に深く根付いている。

三十分程楽しくおしゃべりしながら朝食を食べる。ごはんをかみしめるとだんだん、今日を生きる力がわいてくる。ごはんは一日の元気の源だ。

「ごちそうさま」

こうしていつもの我が家の一日がスタートする。

